

「ワールドカップベスト4」という目標を掲げたサッカー日本代表だが、すでに同じサッカーで世界大会(北京五輪)ベスト4入りを果たしたのが女子の「なでしこジャパン」である。

マラソン、フィギュアスケート、レスリング、柔道等々、日本選手として世界レベルの大会で好成績が期待できるのは女性の方が多いかもしれない。文部科学省が目標とするメダルの数だけを考えれば、むしろ男性スポーツより女性スポーツにより多くの予算を費やした方がメダルの数は増えるのではないか?

しかし、現状では女性ア

# SPORTS MUST CHANGE

谷塚 哲



スリートの環境は男性アスリートに比べ、決して恵まれているとは言えない。アルバイトをしながら世界大会に臨むことは珍しいことではない。また、結婚・出産・子育てを考えれば、女性アスリートの活躍できる

チームが少ない現状では、多くは男子と一緒にプレーするしかなかった。年齢が上げれば体格やパワーなどの差が出て、続けたくても続けにくい。日本には女性スポーツの環境が整っていないのである。

## ママと選手の両立

期間は決して長くはない。しかし、外国ではママさん選手の活躍が目立つことを考えれば日本にだってできないことはないだろう。

そんな中、今、女の子のスポーツとしてチアリーダーやダンスなどに注目が集まっている。これらは団体スポーツ＋ファッショ

日本には、女性ができる団体スポーツが思っているほど多くない。野球、サッカー、バスケット、バレー等、その代表的な団体スポーツのメーンは体育会系であることが多い。団体スポーツは人格形成において非常に教育的な要素が強い。男女問わず幼少期に団体生活を体験することのメリッ

く、プラスアルファの要素が必要なのである。女性スポーツの環境整備は、日本スポーツ界の課題の一つだろう。それは単に環境整備だけでなく、出産・育児などの事情を十分考慮して、社会全体で女性のスポーツ環境を支援する必要がある。そうすれば「選手」であり、「ママ」であるという二つの立場を両立させることは、決して不可能ではない。そのためには、宇宙飛行士、山崎直子さんの夫が家事や育児などで支えたように男性の協力も不可欠である。(REGIST A 有責任事業組合代表)

隔週土曜日掲載